

お天道様は見つかる

京都亀岡の郊外に穴太寺と

あなおい

いう古刹があります。西国観音霊場の二十一番札所です。柔らかな秋の日差しが降り注ぐ中、お参りを済ませてご朱印をいただくために、納経所に赴きました。

ひとりの初老のご婦人が、納経所の女性にしきりと何かを訴えています。家族のことか、ご自分の健康のことか、はたまた宗教的な悩みなのか、詳細は不明ですが話は留めもなく続きそうです。

先を急ぐ身ではないのですが、いつになったら順番が来るのだろうか、心が波立ってきます。この婦人の訴えに真剣に耳を傾けるのは、寺として当然のことです。理屈は分かっているのですが、心のさざなみは次第に大きくなってきます。

この数年全国のお寺を訪ねてきました。こんなことでイライラするとは何のために仏達と対峙してきたのかわかりません。情けない気分になりながら、心の底に泡立つものを悟られないよう、私は平然を装い待つことにしました。

待つほどにそのご婦人は帰っていかれましたが、その間、私の表情や態度に、不快や苛立ちの影が浮かびはしなかったか？ 残念ながらその自信は全くありません。その時です「ひょっとして仏様に観られていたのでは！」そのことに気付いて、私は自分を深く恥じたのでした。

この数年、日本を代表する企業の不祥事が相次ぎました。「お天道様は見つかる」。今こそこの言葉を噛みしめたいと思います。